

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

6

2015

特集 農村の人口減少化を問う



特集

農村の人口減少化を問う

3 「田園回帰」と地方創生—農山村におけるその意義—

小田切 徳美

2040年までに消滅するとされた農山村で今、若年の移住者が増えている。その「田園回帰」の実態を独自調査で明らかにした筆者が展望を語る

7 農業の活性化で農村の人口減少に歯止め

増田 寛也

人口減少は、過疎化が進む中山間地域の農村でも喫緊の課題だ。「消滅可能性都市」を公表した日本創成会議の座長が農村の人口維持・増加策を示す

11 「消滅」回避に挑戦する過疎・高齢化の町

岸上 光克

消滅回避に挑み続ける小さな町の取り組みを紹介しよう。同様に消滅可能性があるとされる自治体に、今こそ立ち上がろうと訴える

情報戦略レポート

15 食品産業景況は先行き改善見通し HACCP導入に資金負担が問題

—2014年下半年 食品産業動向調査—

経営紹介

経営紹介 特別企画「アグリフードEXPO東京2015」

23 きのご屋であることに誇り 商談会を人材育成にも活用

株式会社雲仙きのご本舗／長崎県

展示商談会の特徴に合わせ、開発した新商品を大胆に飾る。バイヤーと真正面から向き合う展示商談会は、人材育成の場でもあるという

変革は人にあり

25 手塚 一利

有限会社山梨フルーツライン／山梨県

「特徴ある果物を生産し、自分たちで売りたい」と生産や販売において独自のスタイルを貫く。常に新しい売り方を模索し実践してきた経営者に迫る



撮影：北條 純之

長野県松本市
2010年6月撮影

ピーマンの白い花

■野山の緑が美しいこの時季、畑のピーマンは純白の清楚な花を咲かせる。膨らみ始めたばかりの実は、これからぐんぐんと大きく育っていくだろう■

シリーズ・その他

観天望気

くいちから 辰己 佳寿子 2

農と食の邂逅

稲作経営・有限会社しらかわファーム 白川 幸枝
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

オーガニックコットンに魅せられて
杉田 かおる 22

耳よりな話 159

イチゴ生産を変えた電照促成栽培
吉岡 宏 28

まちづくりむらづくり

過疎化進む農山村へ若者を人材派遣
ボランティア活動で「地域に笑顔を」
中川 玄洋 29

書評

内山 節 著『自然と人間の哲学』
村田 泰夫 32

インフォメーション

交差点 農業者の海外進出(現地生産)～台湾へ進出した花き生産者の挑戦～ 情報企画部 33

魅力ある経営ビジョンを探るセミナー・交流会を実施
横浜支店 35

台湾市場を参考にした講演会フードネット in 北海道を
開催 札幌支店、帯広支店、北見支店 35

HACCP支援法に基づく計画認定業務の勉強会を開催
融資企画部 35

アグリビジネス支援に向けたセミナー&交流会を開催
岡山支店 35

新規就農を希望される方へ 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第10回アグリフードEXPO東京2015 38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

観天 望気

くいちから

子どもの頃は食事時間が待ち遠しかった。夕飯はなんだろうとワクワクしながら家路についた。家族でワイワイ食事を取った。落ち込むことがあっても涙ながらもご飯を食べていると、祖母が「やっぱり、最後は『くいちから(食い力)』やねえ」と笑っていた。祖母は、戦後の食糧が手に入らない時代を生き抜いてきたから「食べることは生きることの基本」といつも言っていた。

いつからだろうか…。祖母の存在が薄れてきた。「忙しい」時間が「口癖」になった。時間が足りないから食事の時間を削った。食事の時間より、他の時間の方が大事に思えた。孤食が多くなり早食いになった。効率的に時間を使うために「ながら食い」が増え、何を食べたか覚えていないことさえあった。

「こんな食生活は最悪だ」と分かっているけど、日常の生活はこなすことができた。しかし、究極の悲しい出来事に直面したとき、現実を飲み込む力がなく、食事が取れなくなった。食べることで、これほどまでに人を左右するののか、と思い知らされた。

現実逃避をするためにヒマラヤに行った。クタクタになるまで歩いた。もうこんなきつい思いをするのは嫌だと思っても、遭遇する荘厳な風景に心が震えた。ガクガクの足でなんとか歩き、お腹がペコペコになって山小屋に到着した。ホカホカのご飯にスープをかけて食べた。言葉にならなかった。なんだ…。この感覚は…。いつごろからか忘れていた子どもの頃の感覚に襲われた。食べ物が喉を通っていき、身体の中で吸収されていく。農作物や食事を作ってくれた人を想像した。これらの恵みを与えてくれた自然に感謝した。時間を忘れて、自分の中で起こっていることを感じた。祖母の笑顔を思い出した。涙がすうつと頬を流れた。眠気が襲ってきて、ぐっすり眠った。もう歩けないと思っていたのに、朝を迎えると力強く歩ける自分に驚いた。

いつからだろうか…。私たちは「くいちから」をどこかに置き忘れていたのではなからうか。飽食で便利で効率的な社会になればなるほど、不要になる「ちから」なのか…。いや、そうではない。私たちが人間として豊かに生きるための原動力なのだ。



福岡大学経済学部 教授

辰己 佳寿子

たつみ かずこ

山口県やネパールの山間地にてフィールドワークを行い、多様で豊かな生き方が可能となる地域社会の在り方を模索している。専門は地域社会論。主な著書は、『国境をこえた地域づくり』(新評論)、『居場所づくりを始めたネパールの女性たち』、『現代アジアの女性たち—グローバル化社会を生きる』(新水社)など。

お米作りは
一年一作
たった一度だけの収穫
稲刈りのこの瞬間が
うれしいんです

農と食
の邂逅

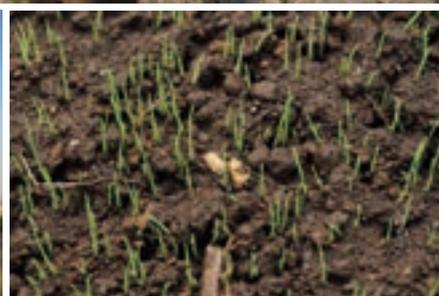
白川 幸枝 さん

青森県五所川原市

稲作経営・有限会社しらかわファーム

田んぼをぐるぐる回っている。小学校四年生の頃、そう父親に言われて、トラクターに乗って代かきをして育つ。その後高校を卒業して、後継者として就農する。現在は規模拡大し、水田五五^{ヘクタール}の稲作経営者である。





P19:米の検査業務も行う幸枝さん。農作業、配達、検査と時期を問わず仕事に追われるが、時間を見つけては家族で釣りに出かけるそうだ P20:父の忠雄さん、長男の皓太さんと(右上) 苗箱の芽が出始めたところ。田植えは5月20日頃から6月中旬まで。主食用の品種は「つがるロマン」と「まっしぐら」(右下右) 頼りになる妹の信江さんと(右下左) 大型機械も難なく乗りこなす(左)

父の姿見て就農

津軽半島の真ん中辺り。太宰治の出身地としても知られる五所川原市金木町で、白川幸枝さん(四二歳)は一九九一年から両親と三〇畝の水田で米作りを始めた。実際にやってみると、子どもの頃には見えなかった多くの作業があることを知った。「苗箱に入れる土を作る仕事や種もみの塩水選など、これほど手間と労力をかけているとは知らなかったです」

休みもほとんどない。父の忠雄さん(七八歳)が周りの人に「農家だつきや、雨降ったら休みだもんな」と言っているのを聞いて、「うそだつて思いました」と笑う。

互いに遠慮がなく、作業のやり方一つとっても、もめる。「けんかはしょっちゅう。間に入る母親(弘子さん、七四歳)はいつもおろろしていました」と話す幸枝さんだが、言葉の端々から父親を立てている思いが伝わってくる。

忠雄さんは中学生の時に父親を亡くし、若くして大黒柱となり家族を養ってきた。「田んぼも一畝ぐらいたったので、冬は生活のために馬を連れて山に入って、製材の仕事をした」との忠雄さんの昔話に、すかさず幸枝さんは「この話も耳にたこで、いつも聞かされていますけどね」と明るく返す。

離農する農家から田んぼを集め、規模拡大してきた両親の苦勞を傍らで見てきた幸枝さんに、「もし、そういう姿を見てこなかった

ら、今のように就農していましたか」と尋ねると、「やってなかったですね」と間髪入れずに答えが返ってきた。

幸枝さんが仕事に慣れてくると、忠雄さんはあまりほ場に出なくなり、大半の作業を任せられるようになった。そんなさなかの二〇〇一年に結婚した同い年の幸二さん(四二歳)と一緒に米作りをしてくれるようになった。ほどなく、妹の信江さん(四一歳)も加わり、若い三人で農場を引っ張っていくまでになった。

幸枝さんは二九歳の時に経営委譲を受けた。「仕事をしてもらっている方が良いので、お金のことは今も父に任せています。父は私の二人の子どもにまで、農業継いだら新しい家を建ててやるぞって誘っていますよ」

お客さんの声が届く

作った米は卸を通さず、全量直接販売している。販売部門は有有限会社しらかわファームとして法人化した。社長は忠雄さんだ。直販を始めたのは一九九三年の大冷害の年だった。地元のスーパから「弁当や惣菜に使う米が足りない。何とか出してくれないか」と頼まれて応じた。すると、その味の良さから「米を販売してみないか」と言われ、本格的に直販を開始した。すると、次第に口コミで評判が広がり、スーパーや飲食店、老人施設向けにも直販をするようになった。

それまでは全量を農協に出荷していた。出来秋には概算金が入金され、資材費などの経

費を相殺してきたが、直販となるとそうはいかない。在庫を抱え、一年かけて代金を回収していくことになる。運転資金を金融機関から借りることもあったが、肥料や農薬などの経費を出来秋に一括支払いせずに、月ごとに請求してもらうなど支払いも平準化する工夫をしていった。



10時の休憩でお茶を一杯。田んぼの枚数は約200。幸枝さん夫婦と信江さんの3人で作業をこなすが、春や秋の農繁期にはパートさんの援護が欠かせない

直販を始めて、これまで以上に米の味に気を配るようになった。収穫後にはワラと完熟堆肥をすき込んで、土に養分を与える。手間がかかるので、どの農家もやるわけではない。長い冬の間、深い雪の下で地力を蓄え、それが米の味となって現れる。食べる人のことを考え、減農薬栽培をしているのだ。

やがて、幸枝さんたちの米をスーパーで買った個人客から「直接送ってほしい」「親戚に送りたい」と電話で注文が来るようになった。青森県の米に対し、質よりも価格の安さというイメージを持つ消費者から「本当にお宅の米だけ？（他県産米を混ぜていないか）」「もっと高い米はない？」と微妙な褒め言葉をもらうこともあるとか。

米の販売担当として注文を受け、毎週金曜日に自ら配達もする幸枝さんは「食べる人の声を直接聞けることが農業をやっている良かったと思う瞬間です」と言う。

「もう一つうれしい瞬間は、やっぱり収穫の時。一年一作だから余計にそう思います。ようやく収穫までたどり着いた、という安心感。でも、玄米にしてからでないと整粒歩合が分からないので大丈夫かな、という不安も入り混じりますけれど」と笑う。

ラーメンよりおにぎり

二〇一四年産米価格の大幅下落は青森県の稲作農家にも衝撃を与えた。全農青森県本部が提示した概算金は「つがるロマン」で六〇キログラム当たり七六〇〇円。一五年に入ってからの新規契約分はさらに減額という信じがたい事態になった。収入減少影響緩和（ナラシ）対策で最終的に調整されるとしても稲作農家の収益は厳しいはずだ。

実需者に直販しているしらかわファームは幸いにもその影響が緩和できた。スーパーでのしらかわファームの米の小売価格は一〇

キログラム当たり二二〇〇円前後で、他県産米と比べると安い。店舗からは「他の米も値下がりしているし、白川さんの米も値下げしてもらえるか？」と要請され一部応じたが、一定の収益は確保できた。早くから直販を行ってきたことが幸いしたのだ。

それでも幸枝さんは消費者の米離れを痛感している。「高齢者の世帯は、米じゃないとだめとまとまった注文をしてくれるが、若い世代は違う。青森の人は特にラーメンが好きで、夫や子どももそう。でも、面白いことにおにぎりを作るとよく食べるんですよ」

家族会議では、従来の米販売に加えて「おにぎり作って売るべし（売ろう）」「餅をついて売るべし」と加工販売の話も出ている。一番乗り気なのは忠雄さんだが、幸枝さんも前向きに考えている。「ただ、店をやるとなればおにぎりだけ売れば良いのか、他の商品もそろえるべきかどうか考えないといけない。そして、良い人材も見つけない」と慎重さも忘れていない。

経営面積は五五杉まで広がった。主食用米の他、県内の製粉業者と契約して加工米（もち米）や政府備蓄米も作っている。米対策が大きく変わりつつあるが、「今販売しているお客さんとの信頼関係を大事にする米作りを続けたい」と地に足の付いた考えを持つ幸枝さんの眼差しが忘れられない。北の大地で家族が力を合わせて生産した米から作るおにぎり。おいしいに違いない。

（青山浩子／文 河野千年／撮影）

Forum Essay

フォーラムエッセイ

私の贅沢。それは、雑巾にオーガニックコットン製のタオルを使うことです。贅沢ですよ？私も、最初はもったいなくて、ドキドキしながら床を拭きました。でもね、これで拭いた床は埃が付きにくくて掃除の回数もちよっと減らせる。その上、丈夫で何度洗ってもへたれないと、とにかく優れたもの。ちよっと値段は高いけど長い目で見ると、お得かと思っっています。

私は、今、できる範囲ではあるけれど、食事はもとよりシャンプリーやせっけん、タオルなどをオーガニックの製品に変え、生活しています。このオーガニックな生活は、二〇〇九年にオーガニック葉玉ねぎを食べ、そのおいしさに感激したことをきっかけに始めたんです。そうしたら、思えばずっと体も心もメタボ気味だった私ですが、さまざまな毒素や老廃物を取り払われたように体調が良くなり、心も軽やかに快適な日々を送れるようになったんですよ。

さて、興味があることにはどんどん突き進む私は、魅せられたオーガニックコットンを知るため、昨年一月にはコットンの収穫祭に参加しようと、(新婚旅行も兼ねて)はるばるブータンまで行ってきました。

収穫祭が開催されるチモン村は、ブータンでも東部奥地に位置し、数年前に電気と舗装道路が通ったばかりというところでした。祭りでは、伝統的な栽培方法を行うコットン畑を見学し、手織りなども体験してとても楽しい時間を過ごしました。

また、村民の暮らしを体験したことが私にはとても新鮮でした。彼らは自給自足で、日が昇るとともに目覚め、生きるために必要な仕事を皆で手分けし、ご飯を食べ、暗くなったら寝るという暮らしをしていました。彼らにとって、仕事とは生業なまわいを意味しているんですね。お互いのために働き、だからこそ感謝し合う彼らの姿を見て、「働く」という意味を考え直しました。これも、私にとってはうれしい大きな変化でした。

どうやら、オーガニックな生活は私に新たな気付きや良い変化をもたらしてくれるようです。さあ、次はいつたいどんなことに会おうのでしょうか。そんなワクワクで胸がいっぱいの私です。



女優
杉田 かおる

すぎた かおる
7歳の時「パパと呼ばないで」(NTV系)に出演し子役デビュー。中学生時代に出演したドラマ「3年B組金八先生」(TBS系)で妊娠する中学生を演じ大きな話題となる。歌唱力にも定評がある。女優業の他にもバラエティー番組に出演し人気を博すなど多才ぶりを発揮している。健康、農業に興味を持ち、自然農にも造詣が深い。

オーガニックコットンに魅せられて

イチゴ生産を変えた電照促成栽培

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

吉岡 宏

イチゴの旬が、いつかご存じでしょうか。初夏の季語として用いられるように、イチゴは五〜六月に収穫されていました。しかし、先人の努力によって、新しい品種や栽培技術の開発が進められ、一九七〇年代の初め頃には一二月から収穫できるようになり、クリスマスケーキにはイチゴが欠かせなくなり、このイチゴの早出し(促成栽培)技術は、奈良県農業試験場の藤本幸平さんの逆転の発想から生まれたものでした。

イチゴは秋の低温、短日条件で花芽分化(花になる芽を作ること)し、冬に向かって休眠に入り、その後、低温に一定期間さらされると休眠から覚め、春の暖かさに合わせて生長を開始します。藤本さんたちが新しい栽培技術の開発を始めた頃は、年内に出荷できる栽培は静岡県久能山の石垣イチゴ栽培などごく少数に限られており、その栽培には休眠の浅い「福羽」などの品種が用いられていました。六〇年に兵庫県農業試験場宝塚分場で育成された「宝交早生」はこれまでの品種よりも格段においしいイチゴでしたが、休眠が深く、休眠から覚めた後に保温することで開花を早め、三月頃から収穫する半促成栽培に用いられていました。イチゴは休眠から覚めた後に出蓄



イチゴの電照促成栽培の様子(1975年頃、奈良県天理市近郊)。奈良県農業研究開発センター提供

するのが通常ですが、「宝交早生」は休眠中の一月頃に出蓄し、開花する不時出蓄が多発しました。これらの株は、寒さで結実せず、芯止まりとなって栽培には使えません。

不時出蓄は農家にとっては厄介ものでしたが、藤本さんは全ての株を不時出蓄させれば、「福羽」などと同じように一二月から収穫できる促成栽培に使えるのではないかと考えました。そこで、農業改良普及員の協力を得て、不

時出蓄がよく起こるほ場と起きないほ場の違いや、「宝交早生」と休眠の浅い品種の花芽分化、開花が起こる条件などを比較しつつ詳細に調べました。

す

ると、育苗期に肥料を断つことで花芽分化が早められることが分かり、断根処理などによって花芽分化の早期化を図って、一〇月中旬からビニール被覆による

保温と日没後の点灯による電照で休眠に入らないようにしました。さらに、ジベレリン溶液を散布して葉の伸長を促し、これらを組み合わせ、一月中旬から収穫できる「電照促成栽培」を開発しました。

藤本さんたちが開発した技術が基になり、現在では旬の時期よりも半年以上早く、イチゴが店頭に並ぶようになりました。藤本さんの逆転の発想に感謝したいものです。

F



Profile

よしおか ひろし
1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科(修士課程)修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、(独)農研機構野菜茶業研究所長、(社)日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士(農業部門)。



過疎化進む農山村へ若者を人材派遣 ボランティア活動で「地域に笑顔を」

特定非営利活動法人 学生人材バンク
鳥取県鳥取市 中川 玄洋



若者の元気をおくる仕組み

人口減少と過疎化が進む農山村に若者が、「来る」、そして「集まる」。実は、鳥取県ではこういった動きが盛んになりつつある。

私たち「NPO法人学生人材バンク」は、こうした若者を農村へ派遣して、地域交流の場作りをコーディネートする活動をしている。それは地域を元気にする活動である。

「学生人材バンク」は、鳥取県内に在住する学生に対して「学生に社会とのつながりのキツカケを」を合言葉に、ボランティア、イベント、アルバイトなどの仕事を通して、農村社会との接点を作っている。また学生が、その活動によって得た経験や人脈を社会に出るとき財産となつて生かすことを目的としている。地域に学生が関わることで、若さや行動力などをできる限り還元できるように、「地域に笑顔を」の言葉をモットーに、この視点を忘れぬように活動している。

私たちの活動する鳥取県は、東西一〇〇キロメートル、南北五〇キロメートルで、一九市町村からなり、人口は五七万人だ。主要都市である鳥取市、倉吉市、米子市へは、車を利用すれば、県内の中山間地域からおおよそ一時間圏内にあり、コンパクトな立地になっている。

また、鳥取大学(四学部約五〇〇〇人)と公立鳥取環境大学(二学部約一〇〇〇人)の二つが鳥取市にある(鳥取大学医学部は米子市)。両大学ともに、学生は鳥取県以外から進学してきた割合が多いという特徴がある。実は私も、静岡県生まれで、鳥取大学農学部出身である。

「学生人材バンク」の発足は二〇〇二年。当時私は、鳥取大学の学生だった。大学進学をきっかけに鳥取県でいろいろなことにチャレンジしてみようと思うようになったのが、この活動を始める動機であった。

「学生人材バンク」は、過疎化、高齢化の見られる地域に、若者を送り込み、元気の出る地域にす

るという目標を掲げて出発したのであるが、実は私が「学生人材バンク」を立ち上げることにしたのは、もう一つ理由がある。それは、私が大学生活で得た貴重な経験を私個人の財産だけにしないでなく、後輩につなげたいということである。

私は、数百人のボランティアを仕切つてイベントを行い、企業の社長さんや、鳥取県知事たちと話す機会を持つなど、どれも大学のキャンパスの中にはではできなかった人との触れ合いや、つながりといった貴重な体験をすることができた。

私のこの体験をぜひ後輩につなげていきたいという思いが「学生人材バンク」になり、その後、〇八年五月にNPO法人になった。

現在、学生人材バンクでは、情報提供事業、企画運営事業、キャリア支援事業の三つを中心に事業を行っている。

情報提供事業では、鳥取市内で学生が集まる交流拠点「鳥取情報市場」での冊子と、メール配信システムを使ったボランティア、アルバイト、飲食

profile

中川 玄洋 なかがわげんよう

1979年静岡県沼津市生まれ。2002年、鳥取大学在学中に学生人材バンクを設立。大学院修了後、本格的に事業化する。鳥取県内外に農村ボランティアを派遣しつつ、地域おこし協力隊のサポート事業も行う。2008年オーライ!ニッポン大賞受賞。鳥取大学工学部特任教員。2児の父として育児休暇の取得などNPOの働き方も提案する。

特定非営利活動法人
学生人材バンク

鳥取県内に在住する学生に対して「学生に社会とのつながりのキッカケを」を合言葉に、ボランティア、イベント、アルバイトを通じて社会との接点を作り、その経験や人脈が社会に出るときの財産となることを目的として活動をしている。現在、情報提供事業、企画運営事業、キャリア支援事業の3つを中心に活動している。

店、就職活動の情報を大学生に提供している。メール配信システムには、現在約八〇〇人の大学生が登録をしている。冊子掲載や配信は、企業などから申し込みを受けて、一定の料金によって維持している。キャリア支援事業は、就職を考える会や勉強会、インターンシップを行っている。

「学生人材バンク」の核となる事業が企画運営事業である。これは、農山村で若者が活躍できる場を広げるための支援活動であり、大学生のボランティア派遣のコーディネートなどを行っている。派遣は、〇二年の設立当初から行っている活動だ。県全域の集落に稲刈りなどの農作業や農業用水路清掃、水路柵作りなどを行う学生ボランティアを派遣している。

〇四年より、鳥取県の委託事業「鳥取県農山村



上：ボランティア派遣で農村に滞在する大学生
下：企画を打ち合わせる大学生

ボランティア事務局事業」を受託運営している。この事業によりサービス提供エリアが拡大し、派遣予算の確保をできたため派遣人数も増えた。〇六年から名称を「農村一六きつぷプロジェクト」としており、現在、二九集落へ年間約五〇〇人の学生を派遣している。ボランティアに参加するのは、主に鳥取大学農学部で、彼らが全体の多くを占めている。

若者たちの元気をおくる活動の目標に一步近づいたと思っている。

この土地を好きになる

集落で活動する学生は、大学では学べない現場での経験を求めて、地域のひととのコミュニケーションを楽しむため、また、キノコが好きで一緒に

植菌ができるからなどの個性的な理由までさまざまである。「学生人材バンク」の活動に参加している大学生の多くは、こうした何らかの目的をもって参加している。

私たちは、学生に体験したことを自身の成長の糧にしてもらいたいと思っている。そのために工夫を凝らし、ボランティアとしてやりがいを感じ、モチベーションが上がるような仕組み作りをしている。

例えば、作業後に住民とご飯をともに食べることもある。地域の方と一緒に食事をし、食べながら会話を楽しむことをする。学生と住民が交互に座って、老若男女がコミュニケーションをとりながら食事をする場を作る。これが私たち「学生人材バンク」の活動である。

集落住民は謙虚な人たちが多く、ひと固まりに
なりがちで、特に女性にその傾向があるので、先
に学生を座らせ、地域の人に入ってもらおう工
夫をしている。

最初は緊張気味の両者だが、慣れてくると自然
と話が盛り上がってくる。お互いが名前を覚え
たり、住民から山菜の下ごしらえの仕方など住民の
生活に密着した話を聞いたりすることは、学生に
とっては、土地を好きになるきっかけにもなり、
深いつながりになると思っている。

こういった時間を過ごすことで、交流の継続性
が生まれている。

学生と集落が力合せて

ボランティア派遣を継続していると、地域や学
生から、地域の課題が見えてきて、それを何とか
改善するための企画をしたいと提案が出てくる。

例えば、智頭町で一〇年続いている「村咲ク」や、
三朝町で五年続いている「田舎応援戦隊三徳レン
ジャー」などである。

「村咲ク」は、新しく立て直した地域の集会所を
都市農村交流の拠点にしたいという地域の思い
を、大学生との交流というカタチにして、大学生
が実行しており、夏と冬に宿泊を伴った農村体験
を行っている。地域の方にお風呂を貸していただ
いたり、民泊をさせてもらったりと、毎年少しず
つ改良を重ねた。当初は四軒だった民泊・お風呂
提供の家が今は一〇軒を超えている。信頼が重
なつての結果である。

「田舎応援戦隊三徳レンジャー」は米作りプロ
ジェクトだ。鳥取大学農学部 of 学生七人が「隊員」

として、三徳地域の農家の支援の下、二反の水田
を借り入れ、米の生産から流通・販売まで行っ
ている。生産した米は大学の学園祭で自分たちで販
売している。生産から流通まで体験することで意
識が高まり、規模は小さいながらも、黒字を生み
出している。

農山村の活性化に貢献したいと、「隊員」は学業
やアルバイトで忙しい間を縫って、若い労力が必
要とされる地域水田の草刈りなどのボランティア
活動にも積極的に参加している。また、地域の
祭りに参加し、全国の学生を集める企画を運営す
るなど、地域により影響を与える存在になりつつ
ある。

一方で、このような学生の企画はスケジュール
の共有や、モチベーションコントロールと継承に
難しさがある。スケジュールの難しさの一つに大
学でのテストと長期休暇がある。例えば、テスト
期間や長期休みが明けてすぐに行うイベントを
企画しようとしても、その準備がテスト期間前
になり、なかなか進まない。私たちは、前年度の報告
書などを活用して、あらかじめ想定して動くよう
に指導、サポートしている。

次にモチベーションコントロールについてだが、
学生の興味はよく変わるのである。自分のやりた
いことを見つけることは素晴らしい。しかし一方
で、無責任に、関わっていたことを放棄されては、
一緒に取り組んでいる地域や学生に迷惑がかか
る。そのため、辞める場合は、あらかじめ辞めるま
でのスケジュールを仲間と共有してもらっている。
私たちは、何気なく話し掛けたり、面談を行うな
どをし、モチベーションが心配な学生を早めに察

知するように心掛けています。

後継者サポートを手掛ける

さて、ボランティア活動などを経験した学生が
卒業後「鳥取に残りたい！」と希望する事例が出
てきた。

そこで、二〇一〇年頃より、「学生人材バンク」で
は、地域での新規就農や起業を希望する人に移住
の支援も行っている。

日野町の農家さんには後継ぎ人材を紹介した。
また、農地や機械、住居などを地域に調整しても
らい、県外出身者への就農を促し、二人の若者が
農家を継いだ。二人は地元 of 女性と結婚し、現在
では地域の中心的な担い手になりつつある。さら
に、集落の空き家を活用して民宿を始めた若者も
いる。

若者が集落の中に入る際、地域の理解を得るた
めに時間がかかる場合が多いようだ。しかし、「学
生人材バンク」の場合は、すでに地域からの信頼
を築いている。そのため、移住したいという若者
が現れたときのコーディネートはありがたいこと
にスムーズに行われている。

一四年より、私は鳥取県の地域おこし協力隊の
アドバイザーとなり、隊員と役場の調整や、受け
入れプログラムの設計、隊員の起業支援(情報提
供、文書添削、人脈紹介など)などを行っている。
これにより、地域が活性化する基盤づくりのお手
伝いが今まで以上にできるようになったと感じ
ている。これからも私たちは、若者が関わること
で農村地域に活力を生み、地域の人々の笑顔が増
える活動を続けていきたい。

『自然と人間の哲学』

内山節著



(農山漁村文化協会・2,900円 税抜)

自然は人間との関係次第で変わる

村田泰夫

(ジャーナリスト)

人間にとって自然とは、どのような存在なのだろうか。台風や豪雨による災害を思い起こすと、克服すべき存在である。多くの人は、そう考えがちだが、内山氏は自然を人間と関係のない客観的な対象とは位置付けない。自然は人間との関係の中に存在すると考える。

内山氏は在野の哲学者である。趣味の溪流釣りが縁で、群馬県上野村に滞在するようになって、人間と自然との関係を労働との関わりの中で考察することになった。

山村に住む人々と交流するうち、村人たちは「稼ぎ」と「仕事」を使い分けていることを知った。「稼ぎ」は、お金のための賃労働を意味する。一方「仕事」は、自然に働きかける中で日々の暮らしを支えるための人間的な営みである。例えば、山仕事や畑仕事であり、家や道を修理する労

働である。自然から恵みを受け、「仕事」が自然を再生産してきた。

経済が進展して「稼ぎ」が主流になると、人間と自然との共生関係が切れてしまう。山が荒れ、川の清流が失われ、自然の衰退が始まる。人間との関係が変わると、自然も変容していくことに内山氏は気付いた。

東日本大震災で大きな被害を受けた三陸海岸に今、高さ約二五メートルの巨大な防潮堤が建設されようとしている。津波という自然現象から住民たちを守るためだという。しかし、いくら高い防潮堤を建設しても津波の被害は防げない。自然を克服対象とする防潮堤は、人間と自然との関係を分断し、海を「仕事」の場としてきた人々の営みを奪うことになりかねない。防潮堤建設で砂浜を失った海は、その生態系を貧しいものに変えてしまう。

巨大な防潮堤を建設するのではなく、被害の可能性のある海岸に人が住まないようにすれば、地域住民たちの「仕事」を維持しながら、津波が襲来したときも被害を防げる。津波は自然現象だが、津波被害は人間と自然との関わり抜きに語れないのである。

本書は「内山節著作集」全一五巻の中の一巻である。二〇一四年七月に刊行された。初出は一九八八年に岩波書店から発刊された。二七年前だが、中身はまったく古びていない。先が見通せない現代こそ、じっくり読んでもらいたい一冊である。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2015年4月1日~4月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農業女子 女性×農業の新しいフィールド	伊藤 淳子/著	洋泉社	1,500円
2 農業と経済2015年3月臨時増刊号 第81巻 第2号 食料・農業・農村基本計画の見直し 新しい基本法以降15年間の検証から見えてくるもの		昭和堂	1,619円
3 農山村は消滅しない	小田切 徳美/著	岩波書店	780円
4 Wedge2015年4月号 減びゆく農協 岩盤規制と農業の行方		株式会社ウェッジ	463円
5 コメをやめる勇氣	吉田 忠則/著	日本経済新聞出版社	1,800円
6 「なぜ3割間伐か？」林業の疑問に答える本	藤森 隆郎/著	全国林業改良普及協会	1,800円
7 日本農業年報61 アベノミクス農政の行方 農政の基本方針と見直しの論点	谷口 信和/編集代表 石井 圭一/編集担当	農林統計協会	3,200円
8 私の地方創生論	今村 奈良臣/著	農山漁村文化協会	1,800円
9 農と村とその将来 規制緩和農政を超えて	矢口 芳生/著	農林統計出版	1,300円
10 農林水産物・飲食品の地理的表示 地域の産物の価値を高める制度利用の手引	高橋 梯二/著	農山漁村文化協会	1,800円

農業者の海外進出（現地生産）

台湾へ進出した花き生産者の挑戦

近年、海外に進出し、現地で農業を営む日本の農業者が増えてきています。海外で農業を営む主な形態としては、農産物を海外で生産し、海外のマーケットで販売するものと、海外で生産した農産物を日本へ輸出する（日本で製品化し主に花きリレー栽培）ものが挙げられます。

今回は後者の取り組みで台湾に進出し、洋蘭栽培を営んでいる仁蘭園有限公司（以下、仁蘭園）の事例を参考に、台湾への農業進出についてレポートします。

台湾へ進出するメリット

台湾は日本から近く、北は亜熱帯気候、南は熱帯モンスーン気候に属しており、年間平均気温は二〇度以上と、温暖な気候となっています。この気候により、台湾での胡蝶蘭苗栽培期間は、日本に比べ約二カ月短縮することが可能です。また、中国や東南アジアにも近く、地理的にも利便性の高い位置にあ

ります。

台湾で法人を設立する場合、海外資本に対する規制はそれほど厳しくなく、ほとんどの業種で海外資本一〇〇%の出資で法人設立が可能となっています。台湾は最も進出しやすい地域の一つといえます。

そのため、日本の洋蘭生産者である株式会社モテギ洋蘭園（本社：埼玉県代表の茂木敏彦氏は、もともと台湾で生産していた胡蝶蘭の苗を輸入していたこともあり、仕入れる苗の安定供給、品質向上、仕入れ費用の低減を目的に、台湾での農業生産を決意しました。

進出から軌道に乗るまで

台湾で三年間語学を学びながら進出の準備を進めていた茂木敏彦氏の長男である仁氏は、台湾中部（嘉義県）に位置する花き生産者部（嘉義県）に位置する花き生産者向けの大規模な農業団地である台湾蘭花生物科技園地区に進出し、二〇一二年に仁蘭園を設立しまし

た。

台湾は近年、外資による農業進出に対する受け入れが緩やかになってきています。

しかし、モテギ洋蘭園が進出を検討しはじめた〇九年当時は、外資による農業進出の事例が少なかったこともあり、台湾政府の認可や農業団地内の生産者からの承諾をもらうまで苦労しました。

一二年にこれらの課題が解決した後は、台湾に拠点のある日系の大手会計事務所法人設立にかかるともあり、法人設立の申請から完了に至るまで一、二カ月と、比較的にスムーズに進めることができました。

また、胡蝶蘭の苗栽培に当たり、培養苗の育成ライセンスの取得が必要でしたが、問題なく取得することができました。

仁蘭園があるこの農業団地は、台湾政府が農業振興策の一環で整備し、参入支援する花き専用（胡蝶蘭の苗が中心）の農業団地で、生産者に土地を賃借しています。現在は、約五〇社が花き栽培を営んでいます。

ここで栽培された胡蝶蘭の苗は、世界各国へ輸出されており、団地



Data

【台湾の概要】

- 国土面積：三万六〇〇〇平方キロメートル（九州よりやや小さい）
- 人口：約二三三三万人（二〇一三年二月時点）
- 言語：中国語、台湾語など
- 農業生産額：約一兆円（二〇一二年）
- 主要農産物：米、キャベツ、サトウキビ、パイナップル、バナナ

【外務省HP、農林水産省HPより】

【株式会社モテギ洋蘭園の概要】
埼玉県本市で花き（胡蝶蘭等）販売を営む（代表者：茂木敏彦。従業員数七四人。二〇〇五年東京ドーム世界らん展トロフィー賞受賞など、数々の受賞歴あり。）

内には世界のバイヤーが集う展示会場もあります。

仁蘭園は現在、この農業団地内にハウス面積一万平方米規模で経営しており、生産した胡蝶蘭の苗は全量を日本の自社農場へ出荷しています。また、今年の夏にはハウス面積を二万平方米以上に、さらに一七年には四万平方米以上にまで規模拡大を予定しており、近い将来、日本のみならず世界各国へ胡蝶蘭の苗



仁蘭園が進出している農業団地の様子



茂木仁社長と栽培ハウスの様子

を輸出する計画です。

現地雇用の募集は、現地の人材派遣会社の活用や現地紙への掲載を活用しており、仁蘭園は生産部門担当者八人と事務担当者二人の計一〇人の台湾人スタッフを雇用しています。雇用労賃も日本の半額程度で、優秀な人材を確保できています。

特に生産部門においては、毎日、作業内容および作業目標を定め、成果主義を導入するなど、労働者の意欲向上に努めています。

また、胡蝶蘭の培養苗や肥料などの資材は台湾の業者から仕入れています。これら仕入れ業者は、良好な関係を深めた農業団地内の他の生産者に紹介してもらい、ネットワークを築きました。

台湾への進出から現在に至るまで、順調に経営展開ができています。

要因の一つとして、日本式の設計でハウスを建設したことも挙げられます。

農業団地の他の生産者はオランダ式の閉鎖型ハウスですが、仁蘭園のハウスは自然の空気を取り入れることが可能な天窓式のハウス（日本式设计）であり、他の生産者に比べ、苗のロス率を低く抑えることに成功しています。

入念な進出準備がカギ

前述の通り、台湾へ農業進出するメリットとしては、進出する際に栽培品目特有のライセンスの取得や農業団地内への進出許可などの条件がクリアできれば、台湾政

府の支援の下、大規模な農業団地で安定した生産が可能であること、

栽培期間の短縮や人件費の削減などによる経営コストの低減が図れること、近隣アジアを中心とした海外市場のニーズの把握が可能になることなどが挙げられます。

これらを踏まえ、日本国内の農業経営への影響度と進出の必要性を明確にした上で、入念な進出計画を立てることが重要です。

進出準備の際には、作物の適合性、台風などの自然災害、輸出する場合の植物検疫規制など、あらゆるリスクを視野に入れておくことも必要です。

また、税務申告などを依頼する税理士事務所や肥料・資材の仕入れ、輸送にかかる運搬の現地業者など、サポートしてもらえネットワークづくりを進出前に進めておくと、スムーズに農業経営が開始できます。

新たな農業の展開

今後、仁蘭園は胡蝶蘭のブランドを世界に発信していきたいと考えています。

台湾から日本への輸出のみならず、米国やEUにも新たに販路を築き、輸出を拡大していく構想を

持っています。

これらの取り組みにより、台湾の仁蘭園の経営発展に伴う相乗効果で、日本の親会社であるモテギ洋蘭園もさらに経営発展するといったスキームを構築し、モテギ洋蘭園グループ全体で総合力を発揮していく方針です。

また、仁蘭園は習得した台湾への進出のノウハウを活かし、これから進出を検討している他の日本の生産者に対して、サポートしていくことを検討しています。

日本の人口減少により消費者ニーズの先行きや農業従事者の確保が不透明な中で、日本の農業者が国内農業の維持・発展を目的として海外に進出し、新たな販路開拓やジャパンブランドに対する需要創出につながる取り組みは、日本の農業者の将来を見据えた新たな展開です。

一方で、生産拠点が完全に海外に移転してしまい、日本国内の農業が衰退する事態は避けなければなりません。

今後、仁蘭園のように、日本の農業経営の発展に寄与する海外進出の取り組みを、注目していきたいと考えています。

(情報企画部 川原新一郎)

魅力ある経営ビジョンを探る セミナー・交流会を実施

二月一六日、神奈川県農業法人協会などの共催で「かながわ農業法人セミナー」を開催し、約八〇人にご参加いただきました。

三菱商事株式会社シニアアドバイザーの吉田誠氏から「農畜産物・加工品の輸出および国内バリューチェーンの構築〜地産地消にみる食と農のこれから」と題して農産物を仕入れる企業の観点や日本農業が直面する問題についてご講演いただきました。参加者からは「経営の強みや弱みを考える良いきっかけとなりました」などの感想が寄せられ、充実したセミナーとなりました。（横浜支店）



国内農業や食品の物流・商流づくりについて語る吉田氏

台湾市場を参考にした講演会 フードネットin北海道を開催

二月二六日、札幌市にて公庫のお客さまや関係機関の交流会「フードネットin北海道」を開催し、約二〇〇人にご参加いただきました。

講演会では、伊藤忠商事株式会社北海道支社長の松本隆司氏より「北海道の食産業・農業のグローバル化と課題」と題してご講演をいただきました。

参加者からは「アジア市場の動向や北海道ブランドの推進について参考になりました」「懇親会では多種多様な業種の方と交流が深められました」などの感想が寄せられ、充実した交流会となりました。（札幌支店、帯広支店、北見支店）



多数の聴衆の熱気に包まれた講演会会場

HACCP支援法に基づく 計画認定業務の勉強会を開催

三月四日、公庫本店にて農林水産省との共催で、HACCP支援法とその資金の推進を図るための勉強会を開催し、食品関係業界団体などの指定認定機関一五機関二人にご参加いただきました。

二〇一四年度からスタートした高度化基盤整備計画の第一号案件や、認定実績の豊富な指定認定機関による認定手続きとその留意点、計画作成支援などについてご説明いただき、その後、意見交換と懇親会を行いました。参加者からは「他の業界での取り組みが分かり、参考になりました」などの感想をいただきました。（融資企画部）



継続して開催してほしいとの意見もありました

アグリビジネス支援に向けた セミナー&交流会を開催

三月一〇日、中国銀行との共催で、農林漁業者と商工業者の六次産業化を支援するセミナーを開催し、総勢二二〇人にご参加いただきました。セミナーでは公益財団法人流通経済研究所主任研究員の折笠俊輔氏より「他産業との連携による営業戦略の展開」と題して、六次産業化の失敗と成功例の分析結果を基に戦略的マーケティングについてご講演いただきました。

交流会では交流ブースと新規事業への相談ブースを設置。活発な意見交換が行われ、「新規事業への糸口がつかめました」などの感想が寄せられました。（岡山支店）



異業種交流や新規事業への相談の場となった交流会

新規就農を希望される方へ

幅広く利用できる無利子の 青年等就農資金をご案内いたします

新たに農業経営を開始される方を支援するための資金です。

市町村から青年等就農計画の認定を受けた「認定新規就農者」による農業生産のための施設・機械の取得のほか、家畜の購入費・育成費、借地料の一括前払いなどを対象としており、幅広い事業にご利用いただけます。

■ 青年等就農資金の概要

ご利用いただける方	認定新規就農者 ※市町村から青年等就農計画の認定を受けた個人・法人	
資金の使いみち	青年等就農計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
	施設・機械	農業生産用の施設・機械のほか、農産物の処理加工施設や、販売施設も対象となります。
	果樹・家畜等	家畜の購入費、果樹や茶などの新植・改植費のほか、それぞれの育成費も対象となります。
	借地料などの一括支払い	農地の借地料や施設・機械のリース料などの一括前払いなどが対象となります。 ※農地の取得費用は対象となりません。
	その他の経営費	経営開始に伴って必要となる資材費などが対象となります。
融資条件	返済期間	12年以内(うち据置期間5年以内)
	融資限度額	3,700万円
	利率(年)	無利子(お借入の全期間にわたり無利子です)
	担保・保証人	実質的な無担保・無保証人制度 担保:原則として、融資対象物件のみ 保証人:原則として個人の場合は不要、法人の場合で必要な場合は代表者のみ
ご留意いただきたい事項	1 国の補助金を財源に含む補助事業(事業負担金を含む)は、本資金の対象となりません。ただし、地方公共団体の単独補助事業や融資残補助事業(経営体育成支援事業)は対象となります。 2 審査の結果により、ご希望に添えない場合がございます。 3 上記以外にも資金をご利用いただくための要件等がございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル(0120-154-505)または最寄りの日本政策金融公庫支店(農林水産事業)までお問合せください。	

みんなの広場

◆四月号特集『農業の人材を育む力とは』を楽しく拝読しました。

三人の特集は各々のテーマに実績を踏まえた内容であり、とても感銘を受けました。

特に、九州の阿蘇で約三〇年にわたる新規就農をテーマとした木之内均氏の報告で、目を見張ったものが、力となる仲間の出現でした。

ナレッジマネジメント活用にしても、経営の人材育成にしても、個人一人では挫折してしまいます。大手企業でも個人事業でも、結局は「人」なのでしょう。

木之内氏の記事は、それを経験に基づき、明確に示していました。

(熊本市 山口達也)

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する「AFCフォーラム」「アグリ・フードサポート」のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見を同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004

東京都千代田区大手町一丸一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 03-3137-0135

編集後記

④ NHK朝の連続テレビ小説マツサンの舞台北海道余市町のニッカウチスキー工場を見学しました。自らの努力と地域の支えにより夢を実現したドラマに胸を熱くし、琥珀色の液体にむせました。同様に、地域の課題を克服していくのは本号でもご紹介しているように核となる人と地域の共感。取り組みに勇気をいただきました。(嶋貫)

④ お米の一番おいしい食べ方は、炊き立てのご飯に塩をまぶして握っただけの塩むすびだと思います。のりも何もいりません。あの何とも言えない香りと一口かむとホロッとほどけるご飯粒の食感がたまりません。「農と食の邂逅」の白川さんの作るお米もとてもおいしいんでしょうね。子どもは正直です。おにぎり大好きだよ。(小形)

④ 過疎や高齢化により消滅の可能性があるとされた市町村があります。農村で人口を増やすためにはどのような取り組みが必要なのでしょう。農村が抱える課題を捉え、今後の行方を探った今号。すみ町では、過疎・高齢化に苦しみながらもユーモアあふれる取り組みを実行している地域の方々に魅力を感じました。(城間)

④ どんなに高熱が出て具合が悪くても、ご飯だけはしっかり食べる娘。そのおかげか回復が早い。これも「くいちから」でしょうか。「観天望気」を執筆していただいた辰己さんのような体験はしていません。けれど、よりよく生きるために食べないことをないがしろにしてはいけません。と改めて考えさせられました。(林田)

AFCフォーラム Forum

■編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
小形 正枝 飯田 晋平 城間 綾子
林田 せりか

■編集協力

青木 宏高 牧野 義司

■発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>

■印刷 凸版印刷株式会社

■販売

(一財)農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aafs.or.jp
ホームページ <http://www.aafs.or.jp/>

■定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結



アグリフード EXPO 東京 2015

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

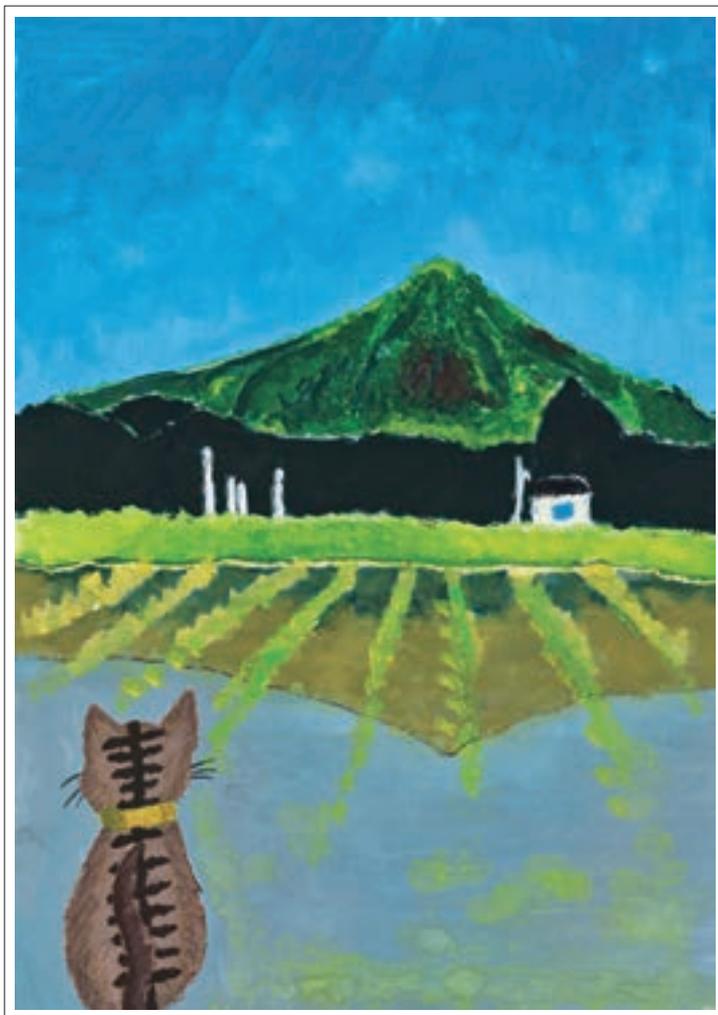
日時 8月18日^火/19日^水
10:00~17:00 10:00~16:00

主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 東京ビッグサイト 西1・2ホール



農村の人口減少化を問う



『能登の富士』山屋 輝理 石川県志賀町立富来小学校

■AFCフォーラム 平成27年6月1日発行(毎月1回1日発行)第63巻3号(778号)
■発行／(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売／一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■定価514円 本体価格476円



